UKON 句集　　花明り

白薔薇（しろそうび）　生命あるもの　切るなかれ

ゆったりと　菖蒲見るごと　歩みたし

万緑裡　受洗の顔で　仰ぐ天

日本語の　通じる国の　大旱（おおひでり）　※ 台湾

ハレルヤは　天国語也　旱畑

発熱の中の　証詞（あかし）に　扇風機

人灼くる　風死す国を　恵みませ

祈り来て　台北（タイペイ）喜雨の　中に在り

揚羽蝶　羽打てど　硝子窓の中　※「障害」児教育講演会

無月とて　散策やむる　子等でなし

地の果ての　祈祷（いのり）よせきて　秋気澄む

※ ’80 ビリー・グラハム 大阪 国際大会

二万人　傘 閉ず　秋の雨止みて

秋陰や　今 ハレルヤの　大合唱

天高し　歩きながらも　祈りいる

死に向かふ 揚羽や　看取る ひまもなし

赤薔薇の　ひとひら散りぬ　血の如く

わが心　薔薇の館（やかた）と　なしたまえ

白き薔薇　心に咲けば　立ち去らむ

妻恋し　初めの愛に　蝉 動く　※ 秋田

陽の光　たくわえ初めし　青りんご

青りんご　黄なる蜻蛉の　憩ふ刻（とき）

永遠の今が　いのちの　蝉の唄

生くるよな　死んでいるよな　秋のはえ

御国（みくに）まで　二人三脚　天高し

入れ墨の　男と共に　降誕歌

餅焼きて　難民の死を　思いけり

花ふるえ　　刻ゆるやかに　　暮れにけり

数あれど　　この桜木に　　魅かれけり

父の日の 父よ　　幼き日を 語れ

生き浮かぶ　　セミ 助けんと　　草投げる

タカラなく　　位なく 跳ぶ　　水馬（あめんぼう）

廻り切り　　独楽（こま）は静かに　　召されけり

歌がるた　　王や貴族に　　あらざりし

つかれたる　　体を 花の　　降る中へ

翔ぶ如く　　復活節の　　教会へ

目が会いて　　微笑（ほほえみ）交わす　　子どもの日

蝉うたふ　　賛美の真中　　肉 浸す　　※ 洗礼式

秋風に　　緊張解けて　　笑む エミちゃん　　※ 富田小学校 運動会・リレー

末の娘は　　ハモニカ 得意　　クリスマス

初旅は　　御国に遊ぶ　　福音書

夜半の秋　　妻 追いつめていく　　会話

よろけ行く　　秋のゴキブリ　　打つべきや

寝ころべば　　紅葉の海を　　漂わん

厚着して　　イエスの死を泣く像の 前　　※「マグダラのマリヤ」

雪の日の　　生き方を問ふ　　名画面（シーン）　　※ 映画「赤ひげ」

雪映えに　　眩し 大富士　　父のもの

桃の花　　蜂と蟻との　　昼餉時（ひるげどき）

花近き　　天の香久山　　夕祷り（いのり）　　※ 大和三山

開きたる　　聖書に 花の　　散りかかる

菜の花の　　微かに揺れて　　虫の恋

山茶花の　　紅（あか）よりも濃し　　主の血潮

ちはやぶる　　神の救いの　　お年玉

主の恵み　　数うる如く　　お年玉

安らかに　　山桜散り　　天国へ

血と燃えて　　きりしまつつじ　　主に仕ふ

白薔薇に　　対い（むかい）優しさ　　湧く如し

夫婦して　　息出きぬまで　　初笑ひ

山焼きの 炎　　御霊と成り　　迫る

ゆったりと　　時の流れて　　梅に蜂

主の愛に　　答えて 赤く　　燃える薔薇

けふも来て　　一期一会の　　薔薇の精

新しき歌を　　うたわん　　薔薇どちに

おおかたは　　果てたるなかや　　薔薇惜しむ

初礼拝　　新たな 祈りの家と　　なさん

初空に　　御手のわざなる　　新会堂　　※ 阿武山福音自由教会

桜降り注ぎ　　恵みを　　給ふ神

れんげ田に 眠れば　　天に 在る如し

牡丹（ぼうたん）の　　雨に打たれて　　打たせいて

薔薇 愛（め）ずる　　優しき人らとの　　出会い

薔薇の香を　　御霊の宮へ　　深呼吸

月明に　　人消え 薔薇の　　さんびうた

父逝きて　　父の日になす　　すべもなし

声かけて行く　　祈祷会　　待宵草

月に兎　　児らは初めて　　聞くといふ

秋冷や　　写真にうつる　　みな死せり　　※ アウシュビッツ展

光あるうちに　　紅葉の　　さんびうた

光待つ 熱あれ　　凍てし　　的ヶ浜

※ 別府・的ヶ浜焼き打ち事件（1922 年）

寒椿 見つめ　　わが主に 見つめられ

キリストの　　血いろ伝えよ　　寒椿

目をつむることの　　安らぎ　　寒き朝

受難週　　疲れて急ぐ　　祈祷会

復活の花と なりたる　　百合 活ける

受難日も　　つねのごとくに　　始まれり

「障害」の児は　　大声で　　卒業す

れんげ田の　　永遠（とわ）の眠りの　　覚めにけり

右頬に　　蛍とまるも　　奇蹟なり

紫陽花の　　雨をあつめて　　したたれり

夏の夜　　解き去り難き　　賛美の手

安息日　　人 忙しく　　天高し

双六や　　母の上がりは　　天の国

数の子の　　数ほど 神の子　　集ふ宮

初礼拝　　祈る宮こそ　　天の門　　※ 創世記 28 章 17 節

散る花に　　混じりて飛べる　　しじみ蝶

薔薇眺む　　人なら　　ゆるされぬほどに

けふの日を　　賛えて 薔薇園　　昏れんとす

初泣きの子の　　笑いいて　　神家族

讃え行く　　葉桜の道　　主は牧者

初礼拝　　新しき歌　　舞い昇る

明けの春　　きよらに旧き　　街通り

雪晴れの　　富士山頂や　　主の足座

咳こみて　　苦しむ人を　　見ておりぬ

れんげ田を　　飛び交う魂や　　虫どちと

秋高し　　山に散りゆく　　子どもたち

人眠る　　せいいっぱいの　　蝉の唄

炎天下　　捨てられてある　　トラクトよ　　※ 配布用のキリスト教文書

平凡なる 夫の　　妻よ　　秋は来ぬ

身障者の　　手づくりパンの　　おいしい秋

ルノワールの　　少女と我の　　秋深し

初買いや　　笑顔もどりし　　震災地

※ 神戸　　そして、東北の町々にも

花明り

うるわしき　　君との出会い　　花の陰
花の粧い　　やさしさ生（あ）れて
初めの愛に　　ほほえみ交わす
今がいのちの　　ほのかにゆれて
花ふるえ　　刻（とき）ゆるやかに　　すすみけり

君ありて　　我もあるなり　　君は花
心きよらに　　咲きあふれいて
薄墨色の　　花のかぐわし
花降り注ぎ　　花となりゆく
風の道　　伝えて舞える　　花吹雪

君とゆく　　名残りの花の　　降る中へ
一期一会の　　時の流れて
散りゆくも花　　心に咲けば
新しき歌　　ともに歌わん
わが心　　花の館（やかた）と　　なしたまえ